浜松南高新聞
発行所
県立浜松南高校新聞部
静岡県浜松市米津町
印刷
浜松共同印刷株式会社

新規約も実施されて
意欲を燃やす竹田会長

竹田会長を中心とする生徒会本部が、一月から活動を開始している。すでに一月に行なわれた生徒集会、三年生を送る会も無事に終わらせ、現在バンの販売方法、校内の緑化、生徒集会の内容などの問題に力を注いでいる。昨年改正された規約は今年より実施され、本部と委員会との結びつきが強化されている。これに伴い、本部と生徒との結びつきの強化も期待される。また今年は本校の創立十周年に当り、生徒会本部では水族大会、植樹などの記念行事を計画している。

十二月九日に行なわれた会長選挙の結果、投票総数二〇三票、有効総数九六五票、無効投票一三八票で、竹田正明君が四六二票と有効投票総数の半数近くを占めて四十七年度前期生徒会長になった。

そこで竹田会長は次のように抱負を語った。

竹田会長語る

生徒集会がマンネリ化している現在の状態から何か変わった形を本部で話し合って、今までとは異なった目新しい生徒集会を目標に努力する。

会長の諮問で常長会を開き、各運動クラブにおいては練習試合・本試合を問わず結果を報告し、文化クラブでは、コンテストの結果を何らかの方法で報告するといったような、新しい運営方法を使っていくつもりである。

また庭園と花壇の問題をできるだけ廻廊にして、書道部・写真部・美術部などの各クラブのコンテストを開き生徒に鑑賞してもらったり緑化の問題は、学校側と協力してもらい、生徒会のできる範囲でできるだけのことをしていきたい。

規約改正で、もとの規約と異なった部分を、本部役員が具体的に示して、生徒会員に理解してもらうために文書を作成中である。

規約改正に伴う問題としては、総務委員会がなくなったことで慣れないせいか不便を感じることがある。しかし今までのように間接的なつながりではなく、各委員会の委員長が直接本部役員に含まれるということで隔りがなくなり、密接になった。また各委員長が権限をもって各常任委員会を動かせるということで、今までよりも楽になった。

十周年記念について会長個人の意見としては「10年をふりかえってこういったようなテーマで、学校の変動とともに社会の変動を見比べて、選挙をふりかえってみようと考えている。

来年度より、一・二年のクラブ活動が必修になる。これは昭和四十八年度の文部省の指導要領改定の修行措置である。四十八年度の改定であるが、四十七年度から実施されるのは試験的な意味と、四十八年度には全学年、必修にさせるためである。

四月より実施されるクラブというものは、現在行なっているように、正課クラブ・課外クラブと名前だけを分けるのではなく、運営面なども完全に切り離してクラブ活動・部活動をするものである。クラブ活動は、曜日など未定であるが、五十分の正課授業に取り入れ、単位として認定される。

クラブ活動の目的として、指導教師や仲間と一緒に考え、汗を流し、苦しみや楽しみを分かち合う学校生活の充実をはかる、などとされており、またその方法として運動クラブに重点を置き、根気を養う、などである。

人数の調節が不十分で正確な数は出ていないが、学校側で運動重視という方針を打ち出している以上、運動クラブを選択する者が相当数出てくるものと予想される。運動に重点を置くことは、それなりに意義があり、大会結果などだが、問題は施設が余りにも貧弱なことである。問題点として、今のクラブ活動も限り合って、日に日に合って良いうちに処理していきたい。

問題点

大きな問題点として毎年言われている生徒集会がマンネリ化していると言う事がある。この問題について竹田会長は次のような対策案を述べた。「現在の南高での生徒集会はマンネリ化しているので本部内で良く話し合って生徒集会を、今までとはちがった変わった形でやっていきたい」

次に校内緑化の点では、「植物などを枯らせないように生徒会の範囲でできるだけの事をしたい」と会長は語った。

次にバンの販売についての問題がある。昇降口の所で業者がパンを販売するようになって以来、屋休みになれば、たいへんな混雑ぶりを見せている。これについて会長は「無責任な言い方をすればこのような事は言う人個人の自覚に頼るしかないと思う。しかしこの問題については、保健委員会、生活委員会、そして生徒会全部などで話し合って対策に取り組んでいき、一日も早く本便な販売方法はやめてより楽な買い方をしたいと思っている」と語った。

生徒会役員

昭和四十七年度前期生徒会会長には竹田正明君が選ばれた。そして、竹田会長を中心とした新本部役員に次の人たちが任命された。

会長	竹田 正明	23HR	
副〃	松木 繁子	26HR	
〃	土田 雅弘	14HR	
書記	中村 春代	28HR	
〃	富田 伸浩	11HR	
〃	内山 保子	11HR	
〃	小林 弘美	28HR	
会計	藤田 豊	14HR	
〃	鎌倉 豊	17HR	
〃	渡部 明子	21HR	
生活	中村 春美	26HR	
文化	柴田 明	23HR	
体育	近藤久美子	26HR	
保健	以上13名		

左より土田副会長・竹田会長・村松副会長

新生徒会　積極的な活動に期待

論説
自分で規律を作ろう

私たちの身のまわりには、数多くの規律がある。その中にはよく知られているもの、日常生活に直接影響を与えているものがある。その反面、ほとんど知られていないものがたくさんある。そのために私たちは、あまり知っていない規律、たとえば慣習などを無視することがあるとは反対に、規律とは知っていながらも守っていないことがある。

例として交通違反がある。免許所有者は、法令試験に合格しているのであるから、最低限の交通法規は知っているはずである。それにもかかわらず、スピード違反等が続出している。常識として免許のない人は、道路で自動車等を運転することはできないと知っていながら、無免許運転をしている。これらのことは、交通事故につながり、最悪の場合には死に至ることになる虞が大きい。交通規則を守っていれば、交通事故に出くわさないと言切ることのできない現代であるが、とにかく交通規則は、守ってもらいたいものである。

ところで、私たちの身近なところの学校の規律は守られているだろうか。

極少数の生徒においては、「校則とはずるためにあるのではなく、破るためにある」と勘違いしていたり、校則は先生が生徒を縛り付けるための手段であるから守らなくてもいいのだと思っている。校則とはそんなものだろうか。校則とは、その学校の生徒としてぜひとも守らなくてはならないことであり、決して生徒を縛り付けるものではないと思う。

生徒心得では、着帽するようになっているが、現在多くの男子生徒は無帽である。この現象は今始まったことではない。時代の推移等により、制帽を着用するという規律は、だんだん守られなくなってきたのである。既に他校の一部では、着帽の自由化に踏切った高校がある。しかしながら、南高はまだ自由化にはなっていないのであるから着帽するように心がけよう。

大分守られてきているスリッパであるが、まだ一部の生徒の間では体育館シューズ等が履かれている。またトイレのケタも十分に使用されていないようである。スリッパからケタに履きかえるのは面倒だからといって履きかえないというのは理由にはならない。衛生面のことを考えて、分煙の喊入したのであるから有効に使用したいものだ。

多くの人が同じ行動をとろうとする時、一度じゃるのでなく順番をつくり分けて行動をする慣習がある。

幼い時に、遊具を節にして列を組み、自分の番が来るのを待ったことがあり、バス・電車に並んで乗降する際にも、パンを買う時に押合へし合いしている現状はどうしようもないことだろうか。並んで順序よく買うことができないだろうか。並んで買うことにより、生徒も販売する御恩恵を得るだろう。幼い時のことを思い出して並んで買ってはどうだろうか。

学校生活の乱れているところは、結局生徒自身の自覚に頼るしかない。生徒自ら、積極的に生活を正していこうではないか。規律は、永久に不変なものではない。時代時代の生活に適応できなくなった規律を、いつまでも守り続ける必要はない。しかし私たちは適応しない規律をすぐに捨てるのではなく、自分自身でその規律の問題点を解明していき、改正しなければならない。

また与えられた規律を、自分自身で正当な問い、正しければ守り、否であれば改正するように努力しよう。そして自分で規律を作り出して、それを守っていくのもいいのではないだろうか。

一・二年生
クラブが必修に
問題は施設の少なさ

▼陸上部　新人戦県大会が草薙陸上グランドで昨年の十月十六日から十七日に行なわれた。本校では31Rの内藤久仁英君が、男子五種競技（一百㍍一二秒五一四八五点・砲丸投げ一一㍍四七一五四点・一〇㍍ハイジャンプ一㍍七八一六六二点・四〇〇㍍一五秒六一五四四点）で四位に入賞

▼ハンドボール部　新人戦が草薙高校のグランドで十一月二十日・二十三日に行なわれた。この大会では女子が第三位であった。

女子準決勝
本校5−3清水西
準決勝
本校0−9静岡城北
三位決定戦
本校6−3御殿場
三位決定戦のようすを部長は「練習試合もやったことがあったので相手の動きがよくわかり前半でリードを奪い、そのまま後半もおしきった。」といっていた。

▼バスケット　十一月二十三日から二十八日までの六日間新人戦の西部大会が行なわれた。この大会で女子が優勝を飾り第二位という成績を納めた結果次の通りである。

一回戦　本校52−32気賀
三回戦　本校不戦勝三所日
準決勝　本校80−48優
決勝　本校55−60市立

「決勝戦では、各人積極的に対二で抜いていけたと思う。決勝で市立と対戦したが、ポストに大きいのがいてみんなでポストを押さえようと努力したせいか、あまりポストから抜められず、前半はいっぱいっぱいであった。しかし粘りに粘りとされ、せった試合となったが、結局五点差で負けてしまった。」という。決勝と決勝の試合内容を部長に聞かせてもらった。

女子の活躍目立つ
バスケ　二位に入賞

百㍍一二秒五一四八五点・砲丸投げ一一㍍四七一五四点・一〇㍍ハイジャンプ一㍍七八一六六二点・四〇〇㍍一五秒六一五四四点）で四位に入賞

▼ハンドボール部　新人戦が草薙高校のグランドで十一月二十日・二十三日に行なわれた。この大会では女子が第三位であった。

女子準決勝
本校5−3清水西
準決勝
本校0−9静岡城北
三位決定戦
本校6−3御殿場
三位決定戦のようすを部長は「練習試合もやったことがあったので相手の動きがよくわかり前半でリードを奪い、そのまま後半もおしきった。」といっていた。

▼バスケット　十一月二十三日から二十八日までの六日間新人戦の西部大会が行なわれた。この大会で女子が優勝を飾り第二位という成績を納めた結果次の通りである。

一回戦　本校52−32気賀
三回戦　本校不戦勝三所日
準決勝　本校80−48優
決勝　本校55−60市立

「決勝戦では、各人積極的に対二で抜いていけたと思う。決勝で市立と対戦したが、ポストに大きいのがいてみんなでポストを押さえようと努力したせいか、あまりポストから抜められず、前半はいっぱいっぱいであった。しかし粘りに粘りとされ、せった試合となったが、結局五点差で負けてしまった。」という。決勝と決勝の試合内容を部長に聞かせてもらった。

新たに二部結成

このたび、水族部と数学部が新たに設けられた。

一月初旬、生徒会へ結成願いが出されていたものが、代議委員会で、水族部、広報部、数学部、通配部、体操部の五部が、承認された。顧問は場所、経費、顧問活動内容等の問題で一月十六日、職員会議で二部会まった。

水族部は二時部としていたが、プールの完成に伴い、再び活動が開始される。もっぱらプールで体力増進、精神向上を目的としている。今後の活動内容としては、部発展の基礎をつくり、水族日本一をめざして、標習に励むことである。現在部員は男子十人、女子四人である。

数学部の目的は、問題の研究、証明、討論を行ない、それを通じて論理的思考を養うことであるが、ユークリッド、非ユークリッド、幾何学の公理からの研究、過去にならった数学の諸問題の解明などを主な活動内容としている。

これからの発展を、大いに期待したいものである。

限界へ挑戦
マラソン大会開かる

十二月十二日、校内マラソン大会が行なわれた。

当日は、朝方から冷え込みが厳しく風が強く吹き、最悪のコンディションであった。

今年から、走者、徒歩参加者、見学者の三つに分けて行なわれた。参加人員は男子六百十一人中、走者五百八十二人、徒歩十五人、女子は六百六人中、走者五百七十人、徒歩二十五人であった。

定刻、警鐘しきった冬空の中を女子がスタート。男子は十五分遅れて、女子の二倍の距離のコースを出発した。男子長い百日の持久力と耐久力が試み合った。コースも半分を過ぎた頃になると、曲がり角の案内係に横たわる校所所に待機していた先生方に誘導され、足を通らぬ学者も見られた。一人の落伍者も出ず、参加者は無事ゴールに駆け込んだ。この結果、男子では伊藤公美さん（31HR）が、三年連続優勝。女子は河瀬眼美さん（28HR）が、勝利を勝得した。総合では、男子17HRが第一位、女子16HRがそれぞれ優勝した。

今年も全般的に運動部本部の発揮したことが目立つ。一年生も上位入賞者がいたことも注目すべき点であろう。

生徒会本部では今回のマラソン大会について「今年は参加者が例年に比べて多かった。来年もこの調子でみんなが参加できるマラソン大会にしたい」と語った。

なお、第一位以下の入賞者、Rは次の通りである。

男子	一位	広野 馨	24HR
	三位	関 幸久	21HR
総合男子	一位	杉本 晨美	29HR
	三位	高部 名子	16HR
総合女子	一位	23HR	
	二位	26HR	
	三位	18HR	

ガンバレ！　ゴールまであと一歩

先生の高校生時代

私には、高校時代ということはない。それは旧制度だからである。

工場へ学徒動員され、終戦になって、焼夷の学校に移った。のは、中学四年の八月であった。夏の昼中、よく寝り寝の蒸天蒸暑に、小黒板、黒ばきで校舎の廻石廊のあたった廊、下駄はきで校舎の廻石廊のあたった廊、下駄はきで校舎の廻石廊のあたった廊、下駄は

三無主義打倒の決意

限りない未来に挑戦を

第七回卒業にあたって

三年間の生活の締めくくりである三月一日、胸一杯の喜びと共に誰もがこの三年間を振り返るであろう。長くもあり短くもあった三年間、この間には数知れない喜びと苦しみ、そして感激があったであろう。入学の時には希望にあふれ坊主頭とおかっぱ姿だったが、今見事に成長し、ここに巣立っていくあなた達。あなた達はこの学校独自の校風というものをつくってくれた。私達在高生はその校風をよりよくしていくことを、ここで約束したい。

南高生は三無主義の星のように外部からは見られている。けれどもこんなレッテルは、なんとしても取りはずしたい。それには、私達在校生のより一層の精進と、そして今後一生南高の看板を背負って生きていかねばならぬあなた達卒業生のみなさんの努力によるものであろう。

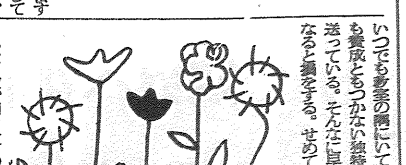
知れは確かに辛い、けれども明日からは輝かしい未来がまっている。苦しかったら思い出そう。あの大磯原を。

卒業になって、教人の卒業生から簡単な感想を述べてもらった。

高校時代なにもできなかった私この南高に物足りなさを感じている。卒業していく今となっては、もうどうしようもないことだが。何をやっても乗ってこない。自分達の感じが堪能環境を起こし、ますます悪い方向に向かっている南高。何かきっかけを作らないと立ち直ることができない。ほっておいたらますます重症患者。そのきっかけを作るのは校生のみなさんしかない。もう今のような状態が続くなら、在校生も今の私たちと同じような気持ちで、卒業を迎えることなろう。たぶそれだけかもしれない。みなさんがどんな気持ちで卒業しようと、私には関係のないことだ。あとはみなさんの判断に任せる。

三無主義に陥って、目的もなく毎日を惰性で過ごし、いつの間にか卒業。毎年、三年生はこう言って卒業していく。これが南高の伝統化しつつある。南校十周年に導くものは、社会に対する正しい知識だと思う。生徒会の本部役員をツルシアゲルのも結構。将来、現体制の上立つことを夢見るのも結構だが、その影ではきっと笑っているものあるだろう。もっと冷静に回りを見つめ、確実に自己と黒を見分け何をすべきか。そしてそれを導く自分自身の知識が必要なのではないだろうか。

近ごろ大人の真似をする人が多い。私たちのまわりにいるみたいな大人になったら、いつだってなれるのに、なぜそんなにあせるのか。外見は若くても心はひどく年を取っている人に時々出会います。何でも知っているような顔をして慣れた手つきでタバコをすって、酒も飲んで、ニヒルな笑いを浮べたりして、妙に落ち着きはらってこれには誰もが答えることができないだろう。答えられてもそれが正しいとは限らない。この狂気の時代で信じられるものは、自分自身であり、その自分自身を正しく導くのは、社会に対する正しい知識だと思う。生徒会の本部役員をツルシアゲルのも結構。将来、現体制の上立つことを夢見るのも結構だが、その影ではきっと笑っているものあるだろう。もっと冷静に回りを見つめ、確実に自己と黒を見分け何をすべきか。そしてそれを導く自分自身の知識が必要なのではないだろうか。



いつでも教室の隅にいて、批判とも賛成ともつかない独特な視線を送っている。そんなに早く大人になると言をする。せめて高校生のうちは黙、聞き分けの無いガキでいようじゃないか。先生に対して大人にだだをこねるべきだ。

名大教授南高に

内容ある話語る

昨年十一月五日、体育館で講演会が開かれた。

講演教授は昭和一年、東京大学文学部心理学科卒業され、現在は名古屋大学教育学部の教授として心理学を講義されている。著書には、「実験心理学提要」(共著)・「質問調査法」・「一般実験」などがあり、その他に多くの委員会に出席され、入学試験の改善などに努力されている。また教授は、四年前にも一度、本校で講演会を開かれており、今回も前回と同様のテーマ「能力と意欲」で講演された。

講演の内容はそれが難しくなく、ユーモアをまじえたわかりやすいお話で、興味深く聴講することができた。

「能力のあるなしは、意欲があるかないかによって決定される」というのが今回の講演会の要旨であった。換言すると、意欲が伴わなければその人の才能は発揮されることがない、ということである。

この点は、現在の南高の実態をまさに指摘しているようだ。よく南高生の欠点として、「意欲の欠如」ということが言われる。知能検査では大部分の人が標準よりも上だそうである。運動能力でも、県下の高校の中ではけっして劣ってはいないのである。従って、学力でもクラブでも、もっと向上していはず、ということである。

講演会の意義は、その内容をいかに自分の生活に生かすかにあるもっと一人一人が自覚して、学校全体の雰囲気を盛り上げていくことが大切ではないだろうか。

講演会を終えて、いつもの集会の時のように無駄話もなく良かったが、集合に遅れたり、講演中に居眠りをしたりしていた人が、わずかではあったが見られたのは大変残念であった。

勢い込む試合

球技大会　一年の活躍目立つ

十二月十七日から二十三日までの四日間、冬季運動大会が運動場体育館で行なわれた。種目は男子サッカー・女子ソフトボール、男女ハンドボール、バスケットボールである。

運動場での応援は、吹きつける寒風とほこりのため、厚手運動大会に比べ活気が見られず地味な応援風景であった。それにしても選手たちの勢い込んだ試合は印象深いものであった。結果は次の通りである。

ハンドボール	
男子	一位33HR　二位32HR
女子	一位37HR　二位29HR
バスケットボール	
男子	一位31HR　二位11HR
女子	一位16HR　二位38HR
サッカー	
ソフトボール	一位31HR　二位11HR
	一位36HR　二位38HR
男子総合	一位31HR　二位33HR
女子総合	一位38HR　二位16HR・36HR　37HR

一学期末テストと寒さのため、練習不十分で試合に臨んだHRもあった。

毎回のことながら三年生の勢力は強かったが、今回はバスケットボール・サッカー等で一年生の活躍が目立った。特にバスケットボールでは速攻やシュートの確実さがうかがい、優勝したHRもあった。

優勝を争う女子ソフトボール

今回の運動大会について生徒から「無関心な人が多い」「協力性がほしかった」「やっぱりひどかった」などという声が聞かれた。また会にしてはよい」という意見も出された。

今後の運動大会を充実したものにするため、よりよい対策を期待したいものである。

弁論大会

内容はより充実

生徒の態度に問題残る

一学期の恒例行事の一つである校内弁論大会が十一月十八日に開かれた。

午前中は四時間の授業を行ない午後の二時間がこの弁論大会にあてられた。

今回で第九回を迎えたこの大会は、外面的にも内容をみた場合にも実りあるものとなって来たようだ。

また運営の面でも審査員を増やすなどして、審査も厳正に行なわれた。この審査員は先生四名、各学年から二名ずつ選出された計六名、生徒会本部から二名の総計十二名であった。

審査員の増加により、去年の弁論大会で問題となった「公平な審査」に対する不満はなくなったようだ。

なお、審査員は各弁士の話し終わるごとに百点満点で点数をつけた。点数の配分、おおよそ基準は

▼論旨（五十点）
・論理的であるか
・論旨となる自己の主張が明確か
・用語が適切でわかり易いか
・説得力があるか

▼音声（二十点）
・発音・発声が明確であるか
・抑揚がほどよいか

▼態度（二十点）
・弁論にふさわしい態度であるか
・聞くものに、聞こうという気持ちを起こさせる態度であるか

▼時間は五分以内で、それ以上かるとき審査点より五十点減点。

となっている。

このような審査基準で、大会が進められた。

基準弁論を竹田正明君が行なった後各弁士の弁論が始められた。

今年は特に、現在の社会や虚構に対する弁論が多かったように思われる。やはり公害問題の高まりや、「経済動物」とまで呼ばれるようになった日本民族に対する批判、反省だろう。

結果は

▽一位　神村ふくみ（28HR）
「自由について」　千二千八点
・発音・発声がしっかりしている
・原稿がよくまとまり内容もよい

▽二位　杉村好美（26HR）
「社会問題に対して」千三千三
・発音・発声がはっきりしている
・ジェスチャーが効果的だった

▽三位　中野文子（37HR）
「要求」　九百五十七
・原稿がまとまっている
・日常の考えがよく織り込まれている
・動作があればよかった

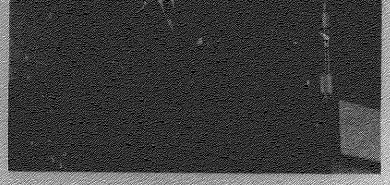
最後に審査員先生が講評をされたがその中で、全体的な評に「きき上手」ということばがあった。確かに、話し手のひとりひとりに特徴があり、また全体として内容も洗練されてきた。しかし、それを聞く多くの生徒が、聞きべたで、ほったらかしになっている。

「やっぱりタイミングよく飛ばせえないだろう。

「やっぱりタイミングよく飛ばせたら『弁論大会』という形を成し共に『じょうず』になったと思う。

浜松南高校弁論大会。それは、何かを言おうとする師と手と、それをわかろうとする聞き手とが共に『じょうず』になったと思う。

来年度の弁論大会では、話し手と聞き手のともに、多くの進歩が見られるだろう。



熱弁を振るう神村さん（1位）

古典に親しもう

参加者少ないカルタ大会

恒例になった校内カルタ大会が一月十八・十九・二十日の三日間にわたって行なわれた。このカルタ大会は生徒会の文化委員会が中心となり、古典に親しむために行なわれている。

今回の出場者は職員一組、三年生一組、二年生九組、一年生二組の計二十六名であり、自由参加であったため、人数が集まらなかった。

三日とも放課後に行なわれ、トーナメント方式で進められた。ゲームは三日間とも順調に進み夕日の差し込む教室に、読み手の声が高く響く姿は、なかなか優雅であった。

順位は次の通りである。

優勝　小野　潔（33）
二位　梨本　智子（33）
三位　近藤久美子（26）

古典に親しむ

第一回芸術鑑賞教室

十月二十八日、本校体育館に先立って「講演」「実演」なる大衆演劇について、第一回芸術鑑賞教室が開かれた。今回は和泉流狂言師茂山千五郎氏の方々が、来校されて「東大名」と「雷」の二つの狂言を見せてくださった。

狂言は約六百年ほど前、能と同時代に生まれたものである。

狂言と能は兄弟関係にあるといわれ、能が神と人間の世界を扱うのに対し、狂言は人間世界ということになろう。神・仏・聖人の世界をかかわりある能と人間の世界を扱う狂言の関係を表わしているようで印象的であった。

茂山千五郎氏の「東大名」は、記事を依頼した茂山先生の所へ、記事の原稿を送ってしまったため、内容の詳細はわからないが、大体次のようなものであった。

「東大名」

クラブ改編にともない、三年生の所属クラブが変更になった。昨年度までは、ソフトボールクラブであったが、今年度からは、バレーボールクラブに変更になった。

クラブ改編は、三年生の所属クラブが変更になったことを、三年生の所属クラブが変更になったことを、三年生の所属クラブが変更になったことを